

バッハのルーツとしてのアフリカ

とにかく素晴らしい街だ。とびきり美味しいものととびきり素晴らしいオーケストラが存在する美しい街、金沢。

子供の頃から美しいものが好きだった。見るもの聴くもの両方だ。オルガンを習っていたこともあり、ラヴェルやドビュッシーのピアノ曲と並んでバッハのオルガントリオソナタが大好きだった。彼の作品の中ではとびきり美しいと思う。今回の公演で取り上げたトリプルコンチェルトの2楽章も、実はそのトリオソナタ3番からのバッハ自身の転用—カバーだ。

冬の寒い朝、まだ辺りが暗い中ラジオをつけると、ゆっくりと少しずつスピーカーの向こうから美しいオルガンの音が流れ出てきた。今思うとあれは真空管式のステレオだったのだろう。それは流れる3つの声部が織物のように絡み合って作り出される、繊細で優雅な、且つ力強い音楽だった。バッハのトリオソナタとの初めての出会いだ。後に、その演奏をしていた盲目のオルガン弾きを訪ねてヨーロッパに行き、自らも住み着くことになるとは夢にも思わなかった。バッハとの出会いは確かにぼくをバロック音楽(16世紀から18世紀の西洋音楽)の世界へと導いて行くことになる。

やがてバッハの音楽はバロック音楽の中でも特殊だと分かって来る。しかしながら彼の音楽のルーツもまた他のバロック音楽と同じ起源に辿り着くのだ。

16世紀の半ば、長崎にも来たあのイエズス会の宣教師らが南アメリカ、メキシコ、ペルー、アルゼンチンに渡ったことがエキサイティングなダンス音楽誕生の発端となった。この時出会った3大陸の音楽(南米の原住民インディオの音楽、アフリカ人奴隷の音楽、ヨーロッパの音楽)が、バロック音楽のメインダンス音楽—サラバンダ、チャコンナ、サマクエカ、パッサリア、そしてフォリアの誕生につながった。最近の研究で分かっていることはサラバンドはアフリカの火と鉄の神様で、本来は軽快なダンス音楽だったということだ。現存する16世紀のポルトガルの作曲家ガスパール・フェルナンデスの作品を見てもオリジナルサラバンドの性格が伺える。

当初これらのダンス音楽は時に歌詞も付けられて、教会の呼び込み音楽やミサの音楽としても使われていたのだが、ヨーロッパに戻って来るなりあまりの猥褻さにバチカンが仰天しミサの中で使われることが禁じられてしまった。しかしその後もあらゆる階級の聴衆と作曲家はその魅力に取りつかれ、18世紀に至る迄何千何万という素晴らしく美しく偉大な作品が生まれた。

時代や暮らしは変わっても人間の基本的感情—愛、憎しみ、喜び、悲しみ、平和に対する安堵感、死に対する恐怖等々は18世紀も今も変わらない。

ドイツのドレスデンで活躍した宮廷音楽家ハイニヒエンのはちきれんばかりのシンフォニア、ライプツィヒの音楽監督バッハの灼熱のトリプルコンチェルト、ロンドンの王室御用達オペラ監督ヘンデルの上品な『水上の音楽』、パリのフランス音楽の先端、王室音楽家ラモーの遺作オペラ組曲、そして今回日本初演となるスロヴェニアのクラシック／ジャズミュージシャンの最新作の一つ『バレエ組曲』。これらの作品が与えてくれる多様な感情とパワーは計り知れないものがあると思う。このコンサートが聴衆の皆様ご自身の再発見となることを願ってやまない。

北谷直樹

